

おひとりさま事例集（５） ～最期を迎える場所～

今回の主人公は、平井勝男さん（83）です。山口県岩国市のご出身で、若いころに東京に出てきてからは結婚はせずに仕事に邁進し、73歳までタクシードライバーとして働いていました。55歳のときに東京23区内に中古のマンションを購入して、ひとり暮らしをしていました。



そんな勝男さん、ここ数年は認知症の症状が目立ち、歩行も不安定になっていたため、介護保険の支援を受けながら生活していました。

ところがある日、勝男さんが岩国警察で保護されたということです。着の身着のまま東京駅から新幹線に乗り込み、岩国で下車して徘徊していたということです。本人によると、「岩国の畑の様子を見に行った。」と。いろいろ話を伺っていると、故郷の岩国に帰って自分の畑で農業をやりたいという気持ちが強いことが分かりました。

その後も、自宅から数時間歩いたところで徘徊していたことが複数回あったため、10年前に契約していた任意後見契約の効力を発効させ、正式な任意後見人として勝男さんの財産管理と身上監護に関わることとなりました。

後見人として調べていくうちに、勝男さんは昭和30年代に東京に出てきて以来、実家の両親や兄弟ともほとんど連絡を取り合うこともなく疎遠となっており、両親の葬儀以外は岩国に帰ったことはなかったこと、岩国の実家や実家が所有していた田畑は、もう既にすべて売却されてしまっていることが分かりました。

当初は、勝男さんの「岩国に帰りたい」という気持ちを尊重し、岩国の老人ホームへの入居の可能性を探り、体験入居の手配もしました。しかし実際には、勝男さんのイメージする昔の岩国と、現在の岩国ではまったく環境が異なっているため、実際に岩国の老人ホームで体験入居をしても、その場が郷里の岩国であることが理解できずにいました。

そこで、もうひとつの「農業がやりたい」という気持ちの方が、本人が体感しやすいのではないかと考え、東京郊外の介護付き有料老人ホームで、中庭に畑があり入居者が農作業をすることができる場所に入居していただくことになりました。すると、それまで常に落ち着かず徘徊を繰り返していた勝男さんが、農作業に精を出し、収穫した野菜を笑顔で他の入居者に振舞うなど、すっかり落ち着いた生活を送れるようになったのです。

それまで、在宅で介護を受けて生活していたときは、「養老院にはいきたくない」と在宅での生活志向が強かった勝男さんですが、合わなかったら自宅に戻れば良いというお試し感覚で有料老人ホームでの生活を始めたところ、すっかり気に入ってしまったのです。

それを見届けた後、後見人として所有していた中古マンションを売却し、その後の老人ホームの利用料に余裕をもって充てることになりました。